OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈書評〉石黒馨・初谷譲次編著『創造するコミュニティーラテンアメリカの社会関係資本ー』
Author(s)	高橋, 典史
Citation	宗教と社会貢献. 2015, 5(1), p. 109-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

石黒馨・初谷譲次編著
『創造するコミュニティ―ラテンアメリカの社会関係資本―』
晃洋書房、2014 年 12 月 10 日、四六判、207 頁、2,500 円（税別）

高橋典史*

1. はじめに

本書は、グローバリゼーションの進展にともなって顕在化してきた社会的排除という問題について、ラテンアメリカ（系）のさまざまなコミュニティにおけるその対応を詳細に考察した研究成果である。とくに注目すべきは、排除にさらされる人びとのコミュニティによる包摂の可能性を、社会関係資本（ソーシャルキャピタル、以下、「社会関係資本」で統一）論を援用して分析を試みている点である。本書は「宗教」を中心的なテーマにするものではなく、著者の大半も宗教研究を専門としてはいない。しかしながら、ラテンアメリカという地域的性格上、多くの章で地域における宗教（とくにカトリック）が果たす役割が何らかのかたちで言及されている。

評者はラテンアメリカ地域の事情については疎く、また社会関係資本の議論に通じているわけではない。本書評では、あくまで評者が有している知識と問題関心に従ってその内容をまとめ、若干のコメントを行うものであることは予め断っておく。

内容を紹介する前に、まずは本書が刊行された背景について説明しておこう。「あとがき」によれば本書は、上谷博氏（天理大学名誉教授）と縁のある研究者たちが、1992 年に発足させた「21 世紀ラテンアメリカ研究会」という「コミュニティ」のメンバー（アクティブ・メンバー）たちによる論集である。同研究会はこれまでに上谷博・石黒馨編『ラテンアメリカが語る近代――地域知の創造』（世界思想社、1998 年）、同編『グローバルとローカルの共振――ラテンアメリカのマルチチュード』（人文書院、2007 年）という 2 冊の論集をすでに出版しており、本書はその 3 冊目の成果となる。

同研究会では 2009 年から本書の刊行に向けた勉強会を開始し、まずはジェラード・デランティの『コミュニティ―グローバル化と社会理論の変容―』（NTT 出版、2006 年、原著 2003 年刊行）の輪読から始めて、刊行まで

* 東洋大学社会学部・准教授・takahashi021@toyo.jp

5 年という年月をかけて執筆者一同が研究視角を共有していったという。後述するが、そうした共通認識の徹底こそが本書の特長であり、全体を通じて高水準の一貫性を生み出している。

次節では本書の目次と内容を紹介していく。

2. 本書の目次と内容

本書の構成は以下の通りである。

序章 グローバル社会におけるコミュニティの創造（石黒馨）
第 1 部 脱伝統的コミュニティ
第 1 章 チアパスのサパティスタ運動―自治区におけるコミュニティ創造の実践―（柴田修子）
第 2 章 在日ブラジル人の宗教コミュニティ―越境するプロテスタント教会―（山田政信）
第 2 部 都市型コミュニティ
第 3 章 ベネズエラの都市貧困コミュニティ―地域住民委員会による上からの創造―（野口茂）
第 4 章 チョルラの都市祭礼コミュニティ―「バリオの子ども」の結束力―（小林貴徳）
第 3 部 農村型コミュニティ
第 5 章 マヤ教会の農村コミュニティ―教会護衛制度と信者の祈り―（初谷譲次）
第 6 章 メキシコ植民地期の先住民コミュニティ―征服による「文明化」と自治区の創造―（林美智代）

序章では、グローバリゼーションの進展のもとで深刻化している社会的排除に対して、さまざまなタイプのコミュニティがいかなる対応を取っているのかを検討することにより、本書全体を通底する理論的視角が提示される。まずはグローバル社会の特徴を紹介したうえで、次に社会的排除を経済的次元、社会的次元、政治的次元に三分類してそれぞれの排除のあり

方を説明している。それらを通じて社会的に排除された人びとを、包摂、統合するものとしてのコミュニティの重要性が示される。そして、「結束型」と「橋渡し型」という 2 つの社会関係資本の類型をもとにして、「コミュニティ」を（1）農村型コミュニティ（結束型が優位）、（2）都市型コミュニティ（結束型と橋渡し型の中間型）、（3）脱伝統的コミュニティ（結束型を基盤としつつも橋渡し型が相対的に優位）に三区分する。そのうえで、グローバル社会時代になって創造されつつある新しいコミュニティとして脱伝統的コミュニティを位置づけ、グローバル資本主義の拡大にともなって国民国家や伝統的コミュニティが衰退するなかで、多様な諸個人が自律的な選択によって包摂されうるオルタナティブなコミュニティとしてのその役割を指摘している。

「第 1 部 脱伝統的コミュニティ」では、メキシコのサパティスタ運動（第 1 章）と在日ブラジル人のキリスト教会（第 2 章）の事例が取り上げられている。

メキシコのチアパス州において、1994 年に先住民のグループによる武装蜂起によって始まったサパティスタ運動は、すぐに武装解除し、その後はインターネット等を駆使してグローバルな支援を受けてきたユニークな運動である。そうしたサパティスタのコミュニティは、（1）ミッションの共有、（2）自治コミュニティの実践活動、（3）アイデンティティの確認によって「結束」を固めてきた一方で、（1）インターネットによる支援、（2）国際オブザーバー活動、（3）支援プロジェクトなどを通じて、国際 NGO や市民社会と「橋渡し」を行ってきたことが指摘されている。

在日ブラジル人たちが集うプロテスタント教会「ミッション・アポイオ教会」は、来日後おもに製造業の労働者として働きつつも、種々の社会的排除にさらされてきたデカセギの人びとを包摂してきた宗教コミュニティである。同教会は（1）エスニシティ、（2）聖書による説教と宗教的実践、（3）苦しみの分かち合いを共有して「結束」しつつも、フリーペーパーや日本人のプロテスタント信者たちと共同して開催するイベント（マーチ・フォー・ジーザス）等を通じて外部と「橋渡し」を行うコミュニティであり、信者の移動性・流動性がその特徴であると論じている。

「第 2 部 都市型コミュニティ」においては、ベネズエラの都市貧困地域における官製コミュニティ（第 3 章）とメキシコの都市祭礼コミュニティ

（第 4 章）が取り上げられる（本書において都市型コミュニティは、脱伝統的コミュニティと農村型コミュニティの中間型に位置づけられている）。

ベネズエラにおいてチャベス政権（1999 年-2013 年）の社会主義的な政府主導で組織された地域住民委員会は、地域における「結束型」の官製コミュニティの中核となってきた。ただし、地域住民委員会は貧国削減を目的としてはいるものの、地域住民の関心の低下や活動の停滞といった問題も起こっているという。また、その一方で地域住民委員会は「橋渡し型」の機能も持っており、国家だけでなく外部の国際 NGO やカトリック教会等との協働のもとで地域の医療・福祉・教育等の問題に取り組んできた点を指摘している。

メキシコ中南部の小都市チョルラ市は、近年、都市近郊のベッドタウンとしての機能が高まってきた地域である。毎年 8 月末から 9 月中旬にかけて催される、同市最大の祭礼「チョルラの祭典」では、同市の守護者であるレメディオスの聖母を祝福する聖人像行列をはじめとするさまざまなイベントが開催される。祭礼は、都市のインフォーマルな地域区分である各「バリオ」内の組織と「バリオ」間の横断的組織（各バリオが持ち回りで担当）の二種の祭礼組織によって担われており、前者は各地域の「結束」を高め、後者は各地域を「結束」させつつも地域間の「橋渡し」の役割も果たしていると論じている。

「第 3 部 農村型コミュニティ」では、メキシコのユカタン半島東部に所在するマヤ教会を中心とする先住民の農村コミュニティ（第 5 章）と植民地時代のメキシコ北西部ミチョアカン地方の先住民コミュニティ（第 6 章）が取り上げられる。

先住民独自の教会であるマヤ教会は、農村のエスニック・コミュニティを形成している。社会的排除にさらされてきた先住民たちは、厳格なメンバーシップにもとづく教会護衛制度、特定的互酬性の性格の強い祝祭、カトリックを模倣した独自の十字架信仰などによってコミュニティの「結束」を高めてきた。先住民たちは「コミテ・マヤ」による商売や自分たちの祈りのテクスト化等を通じて国家、市場といった外部と限定的に「橋渡し」を行いつつも、自分たちにとって居心地のいいコミュニティを維持していると指摘している。

スペインによる植民地化以前のミチョアカン地方にはタラスコ王国の貢

納専制社会が存在し、国王が各地の首長を支配していた。その後、スペインは植民地下の先住民から徴税するために、この王国時代の支配体制を利用しつつも、政治面、宗教面で先住民の伝統的共同体を再編していった。その結果、政治的には主邑と属邑による自治区制によって、宗教的にはキリスト教への改宗による教会の祭礼、施療院の運営などを通じて「結束」された先住民の農村型コミュニティが構築されていったことが論じられている（ただし、萌芽的ではあるものの、ローカル市場の拡大にともなってコミュニティ間の橋渡し型社会関係資本も蓄積していたという）。

3. 本書の成果と若干の問い

ラテンアメリカに詳しくない評者にとっては、個々の章の成果を適切に評価することは難しい。そのため、ここでは門外漢である評者が、全体を通読してうえで気づいた成果や問いを述べていく点は容赦されたい。

評者にとっての本書の最大の魅力は、共同研究の成果をまとめた論集としてのそのクオリティの高さである。執筆者たちはラテンアメリカ地域研究という共通項を有しつつも、対象とする地域や時代、専門分野等はそれぞれ異なっている。通常、こうした共同研究にもとづいた論集では、大まかなテーマや視点は共有しつつも、それぞれの成果は独立性が高いものになってしまう傾向がみられる。しかし、本書は序章で提起された理論的視角を全員が共有し、それにもとづいて各自の事例が分析されている。さらに、各章の構成や叙述の仕方も統一が取れており、専門外の読者にも非常に読みやすいものに仕上がっている。

次にその理論的視角についての評価である。当初、評者は「社会関係資本」という言葉に惹かれてページをめくり始めた。だが、本書を読み進めていくうちにあらためて気づかされたのは、本書がラテンアメリカ地域およびその出身者たちの「コミュニティ」に関する手堅い実証研究の成果であるという点である。各自がこれまで調査を進めてきた、宗教も含む各種のコミュニティの社会的役割（社会的排除という問題への対応）を析出するために、社会関係資本論を援用しているのであり、その結実としてコミュニティの三類型が提出されたのだと評者は推察している。「宗教と社会貢献」研究の分野においては、宗教の社会的役割を考察するうえで社会関係

資本論が参照されてきた。だがその一方で、コミュニティに関する諸議論を十分に踏まえて、それぞれの事例の分析が進められてきたわけではないように見受けられる。そうした点を鑑みれば、本書はコミュニティとしての宗教の社会的役割を考えていくうえで有益な視座を提供してくれる。
また、本書におけるコミュニティの類型は静態的に分類されたものではないため、社会関係資本の視点を通じて類型間のグラデーションのありようや類型間移行の可能性なども検討することができるだろう。

以上のように、周到に計画された共同研究の成果である本書は、優れた内容であることは言うまでもなく、一般読者にも読みやすい良書である。とはいえ、評者は誤読の可能性を承知のうえで、いくつか問いを提示しておきたい。

まず、本書はコミュニティとその社会的機能に焦点を当てる高水準の研究成果であることは確かであるが、「コミュニティ」に注目するあまり、研究対象の事例を所与の実体としてやや「閉じた」ものとして記述してしまっている印象を受けた。グローバリゼーションの進展は、本書で取り上げられている諸コミュニティにも少なからず影響をもたらしていると想像される。そうであるならば、コミュニティの流動性、越境性といったものが、各タイプのコミュニティにおいてどのように生じているのかといった点も論じるに値する問題だと考えられる。

なお、これも前述の問題に関わるものであるが、各事例に関しては、個々の成員たちのコミュニティとの関わりの実態について、もう少し詳細を知りたいところであった。とく社会的排除にさらされる人びとを各コミュニティが実際にどのように包摂し、彼ら／彼女らが抱えている問題にいかに対応しているのかといったことは、当該のコミュニティに対する人びとの関心や支持、ひいてはその存続に関わる重要な点だろう。

本書は「コミュニティ」研究を共通基盤としているため、これらは無いものねだりの問いであり、もちろん本書の成果から比べれば瑣末なものである。「宗教」そのものを中心的なテーマに据えた研究ではないものの、本書が「宗教と社会貢献」研究の領域のみならず、宗教に関心を持つ幅広い読者に読まれるべき成果であることは間違いない。